

Drawing (ドローイング) という言葉は、本来「ひっぱる」という意味であるのに、その部屋 drawing room (ドローイングルーム) がどうして客間と呼ばれるのか、あなたご存じでしょうか。これは実にイギリス有産階級の酒宴から生まれた熟語なのです。いまでも欧米ではデザートを終えてしばらくすると、シャマッけた女性が、「ごめんなさい、これ

グラスが男ばかりの席を右から順に廻され気楽な雰囲気をつくります。シガレットも正餐の席では許されず、ここではじめて喫うことができます。

ところで話をご婦人のほうへ移して、彼女たちが次の間へ退席した。その応接室を名づけて、退ぞく室と呼ばれるのですが、事実はどう一説もあるのですが、事実はそんなナマヤサシイものではありません。

洋酒はなしのタネ

藤 本 義 一
え・佐々木侃司

はアチラの話なんです) 別室へ移され、このときを待っていた男たち、すなわち、どこへ行くにもウルサイのがついでいてどうにもならないアワレな男性諸君は「まあ待ってました」とばかり、女が好まない政治の話や「まあ、イヤラシイ」と胸をツネラレそうなケシカラヌ話をはじめます。そして、このときにポルト酒(ポルトガル産の本場ポルトワイン)の



せん。酔いが廻ってきたそれぞれ亭主からのがれてご婦人たちが次の間へひきさがると、これを待ち受けた馬丁たちは、自分のつかえる主人のツレアイを窓から抱いてひきづり出し、まず何はともあり馬車で邸宅なり居城なりへつれ帰ったというのです。

ドローイングの言葉そのままにひきずり出す部屋であったのが食堂につらなつた応接室。豪華な夜

会服に身を飾り、寶石をキラメカした貴婦人たちが、酔っぱらいの夫(おっと)からのがれて、窓から馬丁に助け出され、ホウホウのタイで逃げ帰ったというのは、近頃だんだんキユクツツになってきた私たち男性にとつて、まったく胸のスツとする話ですナ。もちろん彼女たちは自分の寢室へ避難するとすぐに鍵を堅くおろし酔ドレ城主の侵入をふせいだというわけです。

忠実な馬丁たちはこうしておいてただちに宴会場へとつて返し、食卓の下にブツ倒れているそれれのご主人様をかつきあげ、馬車にのせると堂々と帰館の途についた——と、まあこういうような次第で、ドローイング・ルームの語源、嘘のような本当の話でした。オシマイ。

カクテルの作り方

・ミントフラッペ

Mint Frappe

ミントはペパーミントのこと。フラッペとは、コマかくくだった氷の上からこれをかけ、ストローでチューチュー吸うティンエージャー・スタイルのカクテルです。

パイオレットをつかえばパイオレットフラッペ。カカオをつかえばカカオフラッペ。ポルトワインならポルトフラッペになります。



マダム コンパンワ

MADAME MARCEAUX

マダムマルソー



バーの扉をおして入ると、世の男性諸君はとたんに幼稚園児となるようだ。元来、保母さんというのは女。ダダをこねるヤンチャクレヤ、いつもメンメンしているイクジなしを、「おお、ヨチヨチ」と、きげんよく遊ばせておかねばならない。

ところでこの「マダム・マルソー」だが、マダムといい、何年たってもここにいる若いふたりの女のコレといい、文部大臣あたりから表彰されてもいいくらい、大きな子どもたちを上手にあやしてくれる。私など、あいだはいつもひとりであって、ひっそり酒をたのしんでいるが、そんなときはほったらかし……それがまたとてもありがたいし、話しかけてみると、どんな話題でも豊富でキチンと受け答えをしてくれる。

たまに二三人をつれていくとお客には「ホホー」と感心するくらい愛想よくしてくれて、チョイとヤキたくなるくらい。そのくせ店を出たら友人には「おまえ、なかなかモテてるやないか」とひやかされたり、これすべてマダムの腕。もちろん、どの客に対しても同様である。

妻もつれていったし、初誕生まへの長男もここでジュースを飲んだ。帰るときには、マダムは必ず「おくさまにおよろしく、今度は三人ご一詣で」という。ここを知っている妻は妻で「マダム・マルソーだったら、寄っていらつしゃい」というし私もそれで満足だからもっぱらここを愛用している。場所は阪急西口北入る。

(F)



一店紹介

アクセサリー工芸品の店
元町1丁目
イクシマヤ

流行を創る店

神戸には「伝統とシニセ」を誇る老舗が多い。
ショップビング・センター元町通一丁目浜側一ちようど二丁目との堺にある工芸品とアクセサリーの店「イクシマヤ」もその一つ。
明治初めから元町の発展とともに生きてきた古いお店である。
向って右がアクセサリー、左が工芸品の店と、昨年に改装された三十坪のお店は、一目で店内全体が見渡せるように工夫されており、昨年の神戸市店舗コンクールに秀賞三店の一つとして市長表彰を受けたのもうなづける。



落ついた静かな店に美しいお嬢さんの応待が魅力的です

百パーセントが若い女性でにぎわう「アクセサリーの店」には、首飾り、スカーフ、ブローチなど美しいアクセサリーが豊富にそろっている。中年のご夫婦や、外人居に人気のある「工芸品の店」には、深い銘入りの茶ワゴンや、陶器木彫品が陳列されていて、とても静かなムードを感じさせてくれる。ご主人の生島敏彦さん(48)はもとサラリーマン、三十すぎでからいまのお仕事を受け継がれたそう、商売的な匂いのない、物静かなお人柄である。

お店の雰囲気は落ち着いて静か、それでいて気軽るにひやかしてもできるのが特色。また、美しいお嬢さんたちが、気持よく応待してくれるのもこの店の魅力の一つ。

「流行を創り出す」ことを念頭に仕入れの勉強をしてらっしゃるそうだが、そういえば、戦後いち早くオルゴールを売り出したのはここが最初だった。お客さまへのサービスもゆきとどき、アフター・サービスはもちろん、市内はじめ地方への無料郵送もしているという。

(五十嵐)



波止場

細野耕三
中西勝え

〈前回までのあらすじ〉

被害者の吉田は港灣病院で死亡していた。荷役事故による打殿傷が死因。遺体はお骨になっていた。私は検教協会でその日の積荷が砂糖だったことをつきとめた。全港灣労組でK運輸の線を洗い、一つ一つ足で調べまくった。二次下請の恩田組までは判ったが、そのあとが掴めない。私は吉田の身元を洗うためにドヤ廻りをはじめた。私もアンコになり澄しである。

そして五日目の朝の事だ。私は国産波止場裏の細い露路に面した私設の三十円宿を訪ねた。この地域は地図の上ではすでに区劃整理されたことになっていた。だから私は、何度も近くまできては見逃していたのだ。

たてつけの悪いガラス戸をあけると、汗と体臭のすえた異様な臭いが、鼻をこすりあげてきた。

入口に荒板で仕切った四畳半ほどの部屋がある。開け放された戸の一部に小窓が切っており受付と貼紙してあった。

中年の女が子供に乳を含ませながら、不愛想に私を見上げた。

「おばさん、吉田の友達はいるかい」

「吉田、名前なんか判らへんな。奥へ行ってごころろろしている連中に聞いてみ、花やっとなるわ」

女は面倒臭さそうに答えると、汗ばんだ乳房を子供の口から引き離して、抱きかえた。

私は「じゃあ」と声をかけて中にはいった。

中央に半間ほどの通路があって、両側は四段の番棚式ベッドになっている。収容できる人員は四十人程である。半裸で熟睡している者、表紙が磨り切れている週間誌をぼんやり見ている者など、夫々が思い思いの姿勢で自分だけの世界を、縦六尺、巾三尺のベッドの中に作っている。

奥にかたまって花札を引いている連中がいる。通路に坐り込んでいるのが四人、両側のベッドから首だけをだして、金を張っているのが六人、その連中は夢中になっていて、私の入ってきたことに気付かないでいた。ゴソゾーだ、丁べだと眼の色を変えてわめきかたてている。

私は一番下段のベッドの端に腰をおろすと煙草を一本つけてから何気なくきいた。「兄ちゃん、この頃、恩本組の景気はどうや」

「アカンな」

「だけど、吉田が直行でいっとったろ」

「吉田って」「おい、わいは片の桜に百円だ」

「ほら、競輪狂のよ」

「競輪狂の吉田いうたら、あのトッポイ奴か」

札を配っていた男が答えた。私はしめたと思った。が出来るだけ彼等の調子に合せて

「そうや、そうや、そのトッポイ奴っちゃ」

「親はでけとる。勝負できるで」「ほらよ沖の浮標を掻払って、大阪の屑鉄屋へバイしたら高う売れるったあいつやがな」

私が初めに話かけたアンコは、そう云われて思ひだしたらしく

「ああ、あいつか、それやったら恩田組やあらへん。

栄組やがな」と下札の目を引きながら答えた。

八栄組！全港湾労働組合で調べてもらったりストの中にある。手配師は誰だ！／＼私はおどりあがる気持を鎮めるのに努力しながら

「栄組でも構へん、おやじに頼んで顔付けできへんかな」

「アカンやろ、不景気やしな。オヤジさんも腐ったいうてるで」

「吉田を入れた手配師の」云いかけて、私は失敗ったと思つた。が、もう間に合はなかつた。アンコ達の世界では手配師という言葉は使わない。案の定、感付かれた

「おい」一人が眼くばせした。

「うむ、ほうか」初めの男が領いた。連中は一斉に緊張して、私の顔を凝つと見詰めた。

「おいどうしたい」私は緊急をときほごそうとして声をかけた。札を配っていた男は少しドモリながら「オッさん、オッさんサツの人やろ」

「違ふよ」

否定したが、それっきりアンコ達は私の顔色を見ていただけで口を利こうとしない。私は自分の不注意を口惜しがりながら立つた。

然し、栄組の手配師という線はでた。それに彼等が直

感的に警察の者と私を決めてかかった事から想像して、吉田の死因に対する疑惑は殆んど決定的なものになった彼等の間では吉田の事件は公然の秘密だつたに違ひない

私は入口で声をかけた。挨拶のつもりだつた。

「おばさん、ありがとう」

「判ったかね」

女は横になって子供に乳をまだ含ませていた。はだけた胸からつやのない両方の乳房がでている。別にかくそうともしない。私は一寸足を止められた間の悪さを補うように

「ところで、栄組に行つてるオヤジさんは」と聞いた

「隆さんかい」

「隆？ああそう、隆さんだ。何処へ行つたら逢えるかな」

私は思わず聞き込みで声が震えそうになつた。「さつられないように落着くんた」と何度も自分に云い聞かせた。

「辨天浜の大盛屋と違うか。隆さんたら、あすこのオカミさんに金を貸しとるさかい」

女は含み笑いをしてから、いま気付いたように胸を掻き合せた。

「パチンコじあなければあつこや」

「辨天浜の大盛屋、ありがとう」

「あんた、顔付けしてもらうんか、それやったら、うちでもしてあげるで」

「とにかく、じゃ」

私はもう凝つとしていられなかつた。未だ何か喋りかけそうな女の気配をふり切るように外へでた。

意外なほど簡単にもつれていた糸口がほどけた。アンコの吉田―手配師の隆―隆が出入している栄組。そして恩田組、K運輸だ。手配師の隆さえ押えれば、アンコの吉田の死因は、はつきりする。

私はいつの間にか走っていた。辨天浜のめし屋街は、すでにひっそりしていた。アブレたアンコが四、五人ほ



さんは人がええさかいよう面
倒みよったんや。なんでやる
って、うちらよう云うてたん
やけど」

「隆さん、きょうくるか
な」

「朝は顔をだしよったけ
ど」

「またパチンコかな」

「多分、そうやる、けさ、阪
急ホールの二二一番の台はよ
うでるいうてたさかいな」

「三ノ宮駅前だね。阪急ホ
ールってのは」私の声はもう

興奮していたらしい。

「そうや」めしやのオカミは
急に変わった私の言葉に怪げん

そうな顔をしていたが「ちょ

っと、あんた」と顔色を変えた。私は、もう馳けだして
いた。タクシーを止めた。

「三ノ宮駅前、阪急ホールというパチンコ屋の前だ。
急いでくれ」

私は車が動きたすと、煙草に火をつけて深く吸い込ん
だ。何日振りかで、初めて吸う煙草のようにうまかった
一週間追い続けた努力が、もう少しで実るのだ。手配師
の隆が一切を知っている。私は思わずほころびる口許ど
うしようもなかった。

二二一番、いた。四十二三の男だ。波止場で見掛ける
仲仕のかっこうをしている。皮ジャンパー、黒の乗馬ズ
ボンに紺のきやはん地下たび。だが、想像していた狂悪
そうな顔ではなかった。むしろお人好しの感じさえる

「隆さん」

はじいた玉を眼で追っていた彼は、私の声で振り返っ
た。

んやり坐っていた鉄砲（借り）で焼ちうでも呑んだらし
い一人が何かまくしたてている、その声が午後に近い陽
射中ので虚ろにあたりに拡がる。

「大盛屋」「大盛屋」私は口の中で繰返しながら、並ん
でいる屋台店に近いめし屋を一軒一軒たしかめて歩いた
あった。博愛ではないが、ついている時は馬鹿つきするも
ので、私はここでも思わぬ聞き込みをすることができた
吉田は大盛屋にめし代を借金していたのだ

「死んでもうたものの悪口いうわけやあらへんけど
しようもない奴や。どの店でも鉄砲はするし、うちだけ
でも千円からありますねん。こない一杯二十円のめしで
っしやる、千円も倒されたら、もうわややがな」

「だけど、吉田も運の悪い奴っちゃん」

「手くせが、ようないさかいな、あの時でも砂糖をバ
ケツ一杯掻払うたっていいまっせ。そんな男やのに、隆

「ええと、誰やったいな」

「阪神日報の記者ですが」

「えっ！」

私は突嗟に腕を掴んだ。顔を彼の耳許によせると声を落して「ここでは話ができない。ちよっとつき合って貰えないかな」

彼はおびえ切った眼ざして頷いた。玉をキヤラメルに取替えた。

「お子さんがいるの」

「へえ、十四を頭に五人も……楽しあねえです」

私は「この取材は断念した方がいい」といった気持が瞬間、心を横切った。だが私はすぐ「一人の人間が殺されたのだ」と思い返した。

「その喫茶店でも」と手配師の隆を誘った時は折角掴んだ特ダネ記事が無償のものにできるかと心の中で繰返した。人が殺されたことに対する怒りは、明らかに新聞記者の功名心に変っていた。努力はそのためのものではないしかなかった事もはっきりした。すると、暑い日昼をドヤ廻りしてきた自分の姿が、映画の画面でも見ているように思いだされた。

神戸にある地方有力紙K新聞とS新聞、その記者が阪神日報のような小新聞を奪い合って見、口惜しがる様子を想像して、秘かにしかも満足そうに笑っている自分の顔が、はっきり描かれていた。

私は隆に逢って痛みだした心を押しつぶすようにブンはそれでいいのだと呟いた。

「何か」

「いや、自分の事でね。思いたすと一人ごとをするくせが有って。しかし、隆さん、よく話してくれたね。僕が想像していた通りだ。だけど話の出所はきつと秘密にする」

隆はすがりような眼つきで

「そいつだけは堅くたのんます。わいの口から割れたとなつたら、それこそ、涙で仕事が出来んようになるば

かりでは済まんさかいな。波場で弱いのはアンコやあらへん。わいや三次下請でんがな。元請会社や二次下請会社に睨まれたら、それこそ一家心中もんでんがな。だから……」

隆は手を合せておがむようにして頼んだ。隆は、私が殆んど調べあげておかなかつたらきつと口は割らなかつただろう。いや、まだ隠している部分もある。アンコの吉田が砂糖を盗んでリンチを受けた。誰がリンチを加えたかはっきり覚えていないが、五・六人だったという。然し、私は、その誰と誰は、警察の仕事だろうし、警察が動きだせば事件はもっと明瞭な形で現われてくると思つた。

部長は黙って私の説明を聞いていた。私が氣負い込んで話し終ると、短かくなつた煙草の口を指先でもみながら云つた。「青木君、折角の特ダネ記事には違いないが波止場ではねえ。波止場の機構をつつことになるだろう。そうなれば、うちの社では手に負えないのと違うか」

部長は反対こそしなかつたが、のり気ではなかつた。それも私には初めから判っていた。事実、波止場を中心として縦横に伸びている巨大な勢力が、神戸ではどんな役割を果しているかという事は、ここ一週間、調べ歩いた範囲からでもはっきりしている。私は崩れるように坐り込んで諦めかけた。一切が水泡だったのかと思うと地方紙のそれも小さな新聞社の記者だったことが口惜しくてたまらなかつた。

—— 次号に続く ——

* 神戸っ子案内

* 月刊「神戸っ子」を毎日お読みにになりたい方又神戸を離れているお友達にプレゼントなさりたい方は編集室にお申込み下さい

6ヶ月分500円(送料共)

* 誌上の神戸銘店にはお客様のサービスとして

「神戸っ子」があります

* 本屋さん「神戸っ子」があります

文洋堂国際会館1階 海文堂元町3

◆ 読者サロン ◆



南 陽子 (灘区)

・「神戸っ子」題名も中味のスマートさも気に入りました。私は海の向うの上海生まれですが、神戸びいきで、自分では大いに「神戸っ子」を気に入っています。

山の緑と海の碧にはさまれた、細長い清潔な街、神戸が好きだから、誰に頼まれたのでもないのに時にイパツテみます。「ユトリ口の街角あり、マルケ描く港ありニューヨークの夜景あり、神戸よいとこ一度はおいで」なんて……

私の愛する神戸のことは、書けば泉のようにこんこんとわき出るほど、と思えるくらい。また私の大好きな「神戸っ子」にお便りしましょう。編集部と神戸っ子の皆さま、神戸と「神戸っ子」の発展を祈っています。

(生田区中山手・丸林圭子)

・創刊号からのファンです。ピフテキや中華料理、すしの「うまいものシリーズ」食べるものが唯一の楽しみ私には大へんうれしい企画です。第一カットがしゃれて

る。デザイナー君ががんばってくださいよ。店のアンケートの返信には、ときどきコツンとくるのがありましたが、あまりキザな回答は鼻もちならないもんです。

(須磨区村雨町・和住薫)

・「神戸っ子」五月号は、素晴らしかったですね、やはり小磯先生の絵はいいです。そしてその絵のようにすっきりした内容には目を見張りました。読んで楽しくなったので一筆したためました。

(灘区・小南光子)

・神戸時代の友人から送ってきた「神戸っ子」に、なつかしい故里の香りを満喫しました。「ジョック・ピング・ガイド」は買物好きな私には親切なガイドさんです。こんど神戸に帰えつたらこのガイドさんを頼りにさっそくお買物とシェアしますわ。これからは神戸の新名所もどんどん紹介してくださいね

(横浜・安藤弘子)

・神戸のとある店先まで「神戸っ子」のスマートな小冊誌が、私の目をひいた。無理もない三十年前神戸大丸の中のツーリストビュロー動在当時、大丸宣伝部の塩路、大淵氏らと共に「神戸っ子」創刊に際し関係を持った小生にはとてもなつかしく、むさぼるようなページを繰った。なかなか立派なでき栄えにただただ敬服、何人のスタッフでやっつけらっしゃるのか知らないが、こんごとも大いに健斗してほしいものだ。ガンバレ後輩ノ(大阪住吉区、安井喜一)



THE SECOND COVER

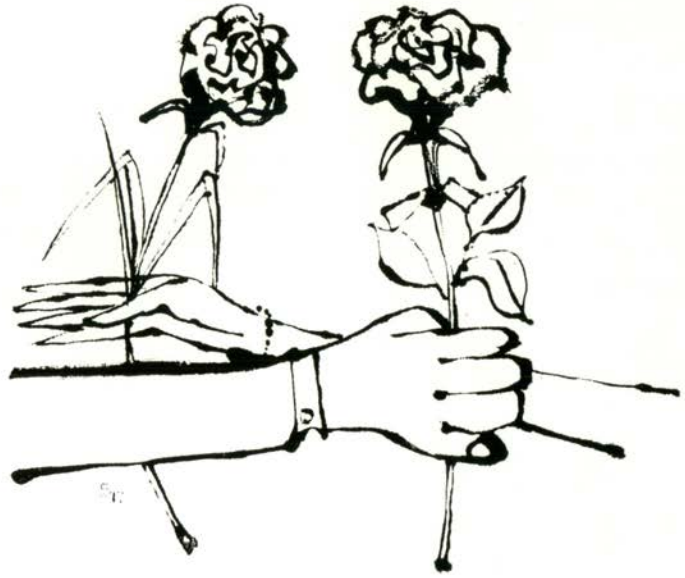
樽井祐子(つやこ)さん19歳の清純な感じの柔和なタイプのBGそれでいて、きりっとしたところは神戸っ娘の特長でしょう。洋裁をしているときが一番楽しいとのこと、気のおけない可愛い下町っ娘といった雰囲気の人、花時計の四季の変化を楽しみながらお勤めにはげんでいらっやいます。

撮影 杉尾友士郎

6月号の発行に色々とお世話
いただいた方々

雄一 一ム 英平 夫 楽 巖 孝 渥 二 介 郎 七 勝 夫 美 男 二 雄 慧
重 正 真 ツ ト 良 芳 喜 義 勝 孝 健 達 政 芳 高 襄 辰
木 並 崎 淵 西 磯 林 林 寺 路 川 川 村 中 井 西 賀 富 井 地 崎 杉
青 榎 岡 大 川 小 小 古 小 塩 白 滝 田 田 永 中 芳 福 松 宮 百 若

三宮ライオンズクラブ



編集後記

52

・神戸市にまたマルセイユという新しい姉妹ができます。シアトル同様、仲良くやっていきましょういかがでしょうか。今月はその姉妹都市提携を記念してフランスムードをおとどけた積りですが

・七月九日、国際会館大ホールで神戸三宮ライオンズ・クラブ主催の「チャーター・ナイト」があり全国から約千五百人の代表が出席されます。「神戸っ子」では、さっそくこれらの人たちのガイド役を買って出ることになりました。「大丈夫かい」って！ご心配なく神戸のことが手にとるようにわかる「神戸っ子」をもれなくプレゼントするんですよ。

・生粋の大阪人である司馬先生回を重ねるにつれ「神戸びいき」の病いがこらえてこられたよう。

・あまり神戸ばかりを賛めては、大阪の人に叱られないかな。もっとも司馬先生お得意の「忍術」でうまく体をかわしてくださいましょう。連載「ここに神戸がある」にふさわしいبرانがあれば教えてください。

・デザイナートのT君が先月末、東京の「銀座百点」の編集室へ顔つなぎに行きました。T君曰ク「やっぱり東京はスゴイ。神戸っ子もガンバラな」K氏答えて「がん張ってまっせ。みんな一人三役で」残る二人は目を白黒(締め切りも迫ったある日の午後でした)(I)

(おわり)五月号で小磯先生の巴里文中「街路樹の植え替えは午後四時から」は午前四時の間違いでしたので訂正させて頂きます)

しあわせをあなたの家庭に運ぶ
よい商店・よい飾えの招待

大丸	表 2
インチャロフ製菓	表 2
御木本真珠 K・K	表 2
柴田音吉洋服店	表 2
風月堂	表 4
北村真珠 K・K	表 4
ちんから屋	表 10
合同タイズ	表 10
田崎真珠 K・K	表 14
元町バザー	表 17
ドンク	表 17
寿本舗	表 17
岸井メガネ	表 23
渡辺	表 23
マキシン	表 24
兵庫トヨタ自動車 K・K	表 25
ヒロタ	表 28
太田ベテ甲店	表 34
淡洲堂	表 34
サノへ	表 35
イクシマヤ	表 35
長崎堂本店	表 35
スギヤ	表 35
水田良介商店	表 36
元町電機	表 36
エスターニュートン	表 36
国際コンタクトレンズ研究所	表 36
ペーリスダ	表 37
トーレイ洋装店	表 37
神戸屋	表 37
つばや	表 37
タジヤ	表 38
神戸シャッソ	表 38
大久保洋服店	表 38
シラサ	表 38
千秋堂	表 39
富田屋	表 39
フナキヤ	表 39
三恵洋服店	表 39
ニオハイムコンフェクト	表 43
竹馬産業 K・K	表 43

- 本誌広告により広告主へ直接御注文やお問合せの際は「神戸っ子」広告による旨お書き添え下さい。
- 広告主の住所不明な時は「神戸っ子」編集室にお問合せ下さい。お取次いたします。
- 「神戸っ子」に広告掲載御希望の向きは「神戸っ子」営業部宛御照会下さい。「神戸っ子」編集室

北 欧 の 銘 菓

ピラミッドケーキ

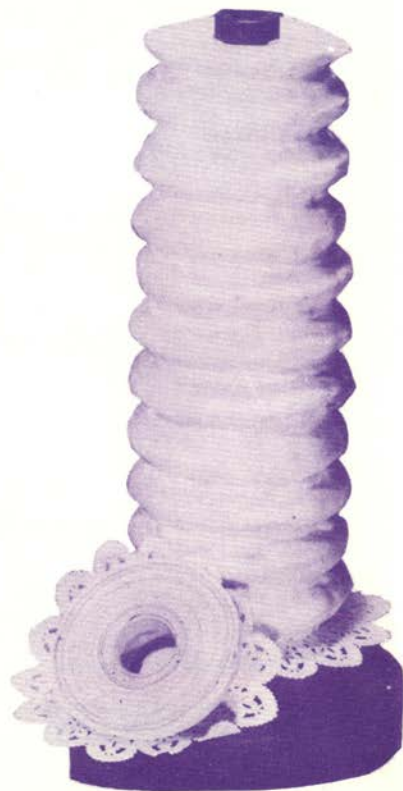
バウムクーフェン(ドイツ名)

クッキー

ムンデッド

ユーハイム コンフェクト

工 場 神戸市葺合区熊内町1丁目・②2336
神戸市三宮町2丁目・③4314
三 宮 店 神戸三宮生田筋(階上喫茶室)③0156・7343
芦 屋 店 省線芦屋駅前通り・芦屋5605
大 丸 店 神戸大丸地階-銘菓街
阪 急 店 大阪阪急地階-食料品部



月刊「神戸っ子」

Refine NIKKETEX



高級紳士服地

リファイン
ニッケテックス

発売元 / 竹馬産業株式会社

神戸・元町通3丁目 ㊟ 5521-5

発行所 / 神戸市灘合区御幸通八丁目九ノ一
昭和三十六年六月十五日発行 毎月一回

神戸国際会館一階
編集 / 五十嵐恭子

TEL(2)七〇三七 頒価七〇円
発行 / 小泉康夫 (送料10円)